

第2章 札幌市の歯科口腔保健の現状と課題

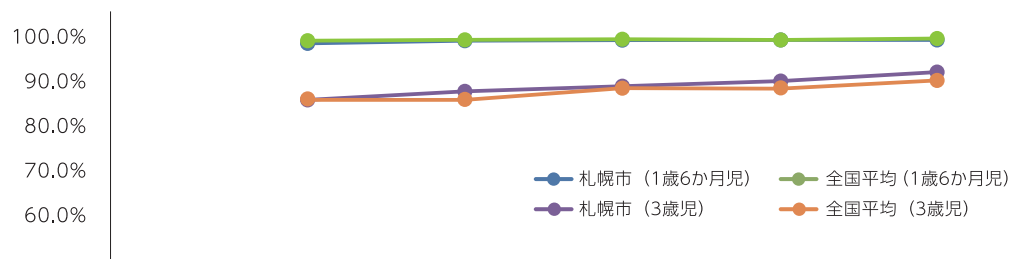
1 歯科口腔保健に関する現状と課題

● 乳幼児期（0～5歳）

乳幼児のむし歯は、減少傾向にあるものの、一人で多くのむし歯をもつ子どもの二極化がみられる状況であり、子どもたちの健康格差の縮小が課題となっています。

○ むし歯のない乳幼児は増加

図 2-1 むし歯のない者の年次推移における札幌市と全国平均との比較



	2017	2018	2019	2020	2021
札幌市 (1歳6か月児)	98.2%	98.7%	98.8%	98.8%	98.8%
全国平均 (1歳6か月児)	98.7%	98.8%	99.0%	98.9%	99.2%
札幌市 (3歳児)	85.5%	87.3%	88.5%	89.6%	91.6%
全国平均 (3歳児)	85.6%	85.6%	88.1%	88.2%	89.8%

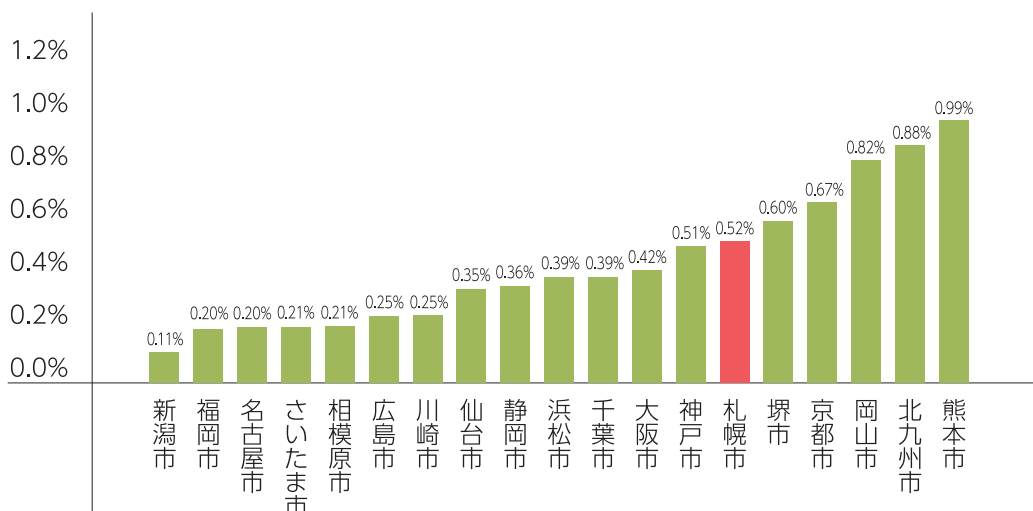
(e-Stat：地域保健・健康増進事業報告より作成)

1歳6か月児におけるむし歯のない者の割合は98.2%（平成29年度）から98.8%（令和3年度）とほぼ横ばいとなっており、全国平均とほぼ同じ状況です。

3歳児におけるむし歯のない者の割合は85.5%（平成29年度）から91.6%（令和3年度）と増加し、全国平均よりもわずかに良好な状況となっています。

- いわゆる口腔崩壊の状態(10本以上)のむし歯のある者について政令指定都市間で比較すると、20市中、ワースト6位であり、健康格差縮小に向けて取り組んでいく必要があります。

図 2-2 口腔崩壊の者の割合における政令指定都市間比較 (3歳児・R3)



(e-Stat：地域保健・健康増進事業報告より作成)

- 3歳児で多数(4本以上)のむし歯のある者は305名、口腔崩壊の状態は38名(令和4年度)など、大きな健康格差が存在しています。

表 2-1 むし歯の本数別人数構成 (3歳児・R4)

むし歯の数	0本	1本	2本	3本	4-9本	10本以上
人数	11,659	144	354	85	267	38
割合	92.9%	1.1%	2.8%	0.7%	2.1%	0.3%

(出典：令和4年度3歳児歯科健診)

10本以上のいわゆる口腔崩壊の状態になるようなむし歯がある場合は、単に糖分摂取等の生活習慣の指導だけではなく、家庭環境等も含め、保健師等と連携した指導・支援を行っていく必要があります。

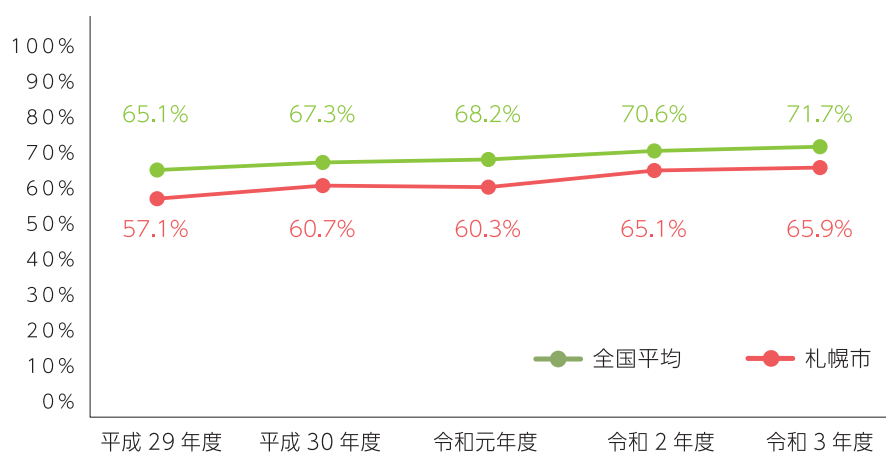
また、歯科受診時や学校歯科健診において、極端に多いむし歯を有する子どもに対して適切な対応が図られるよう、歯科医療機関と市との迅速な情報共有や歯科医療関係者の人材育成が課題となっています。

● 学齢期（6～17歳）

学齢期のむし歯についても減少傾向にあるものの、全国平均を上回る状況が続いている他、学校保健統計において最も有病率の高い疾病である状況は続いています。また、乳幼児期と同様に一人で多くのむし歯を有する子どもの二極化が見られる状況であり、健康格差の縮小が課題となっています。

○ むし歯のない児童・生徒は増加傾向

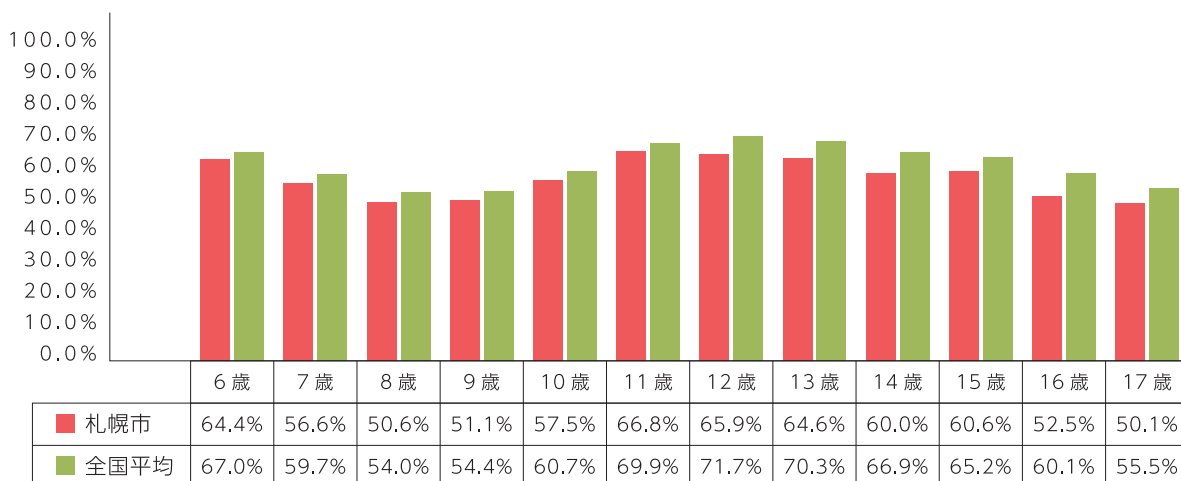
図 2-3 むし歯のない者の割合(12歳児)の年次推移(全国平均との比較)



(令和3年度学校保健統計調査、札幌市学校保健統計調査より作成)

○ 6～17歳のすべての年齢で、全国平均よりもむし歯のない者が少ない

図 2-4 むし歯のない者の割合(6～17歳)の全国平均と比較(R3)



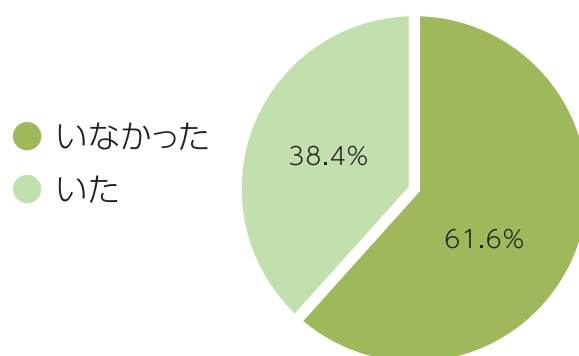
(令和3年度学校保健統計調査、札幌市学校保健統計調査より作成)

12歳児におけるむし歯のない者の割合は57.1%（平成29年度）から65.9%（令和3年度）に増加し、札幌市において、学齢期のむし歯は減少傾向にありますが、全国平均の71.7%（令和3年度）より低く、全国平均に比べるとむし歯を持つ者が多い状況が続いています。

また、6～17歳のすべての年齢で、全国平均よりもむし歯のない者の割合が低く、改善に向けた取組が必要となっています。

- 約4割の学校に 多数のむし歯を有するいわゆる口腔崩壊の状態（10本以上）の児童生徒がみられました。

図 2-5 口腔崩壊の児童・生徒がいたと回答した割合（R3）



（札幌歯科医師会、令和3年度学校歯科に関するアンケート集計）

札幌歯科医師会が令和3年度に実施した学校歯科医師を対象としたアンケート調査によると、口腔崩壊の児童・生徒がいたと回答した割合は38%であり、該当する児童生徒数は340名でした。

（口腔崩壊：むし歯を10本以上有している状態）

Column：多数歯う蝕（むし歯）と社会環境要因および効果的な予防方法

歯科疾患の発生要因は、むし歯の原因菌とそれに関する食習慣やブラッシング習慣といった生物学的要因と貧困や家庭環境などの社会的決定要因があります。

時間的・経済的余裕がないため、低所得者ほど歯科受診をしない、幼少期に虐待を受けた高齢者は残存歯数が少ないとの調査報告があり、社会的決定要因による口腔の健康格差は自己責任で解決することが困難です。

そのため、社会的決定要因によらず、誰でもむし歯予防の恩恵を受けられるむし歯対策として幼稚園、小学校でのフッ化物洗口が有用です。フッ化物洗口は、厚生労働省や日本歯科医学会等が効果的かつ安全なむし歯予防方法として推奨されています。集団フッ化物洗口を取り入れた自治体では、子どもの平均う蝕（むし歯）の数は減少し、特に多数歯う蝕（むし歯）は見られなくなりました。さらに、フッ化物洗口を実施した世代は、50代になっても、う蝕が少ないことが報告されています（厚生労働省「口腔保健に関する予防強化推進モデル事業（令和2年度委託事業）」）。

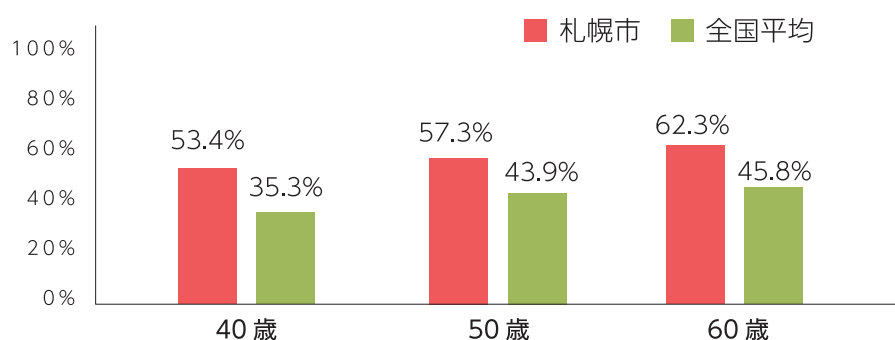
本市においても社会的決定要因によらないむし歯予防対策を進めていきます。

● 成人期(18～64歳)

成人期の歯周病の有病率については、40歳、50歳、60歳とも全国平均を上回っています。また、4～6割の市民が罹患する状況が続いており、横ばい状況となっています。

○ 全国平均に比べて歯周病の有病率が高い

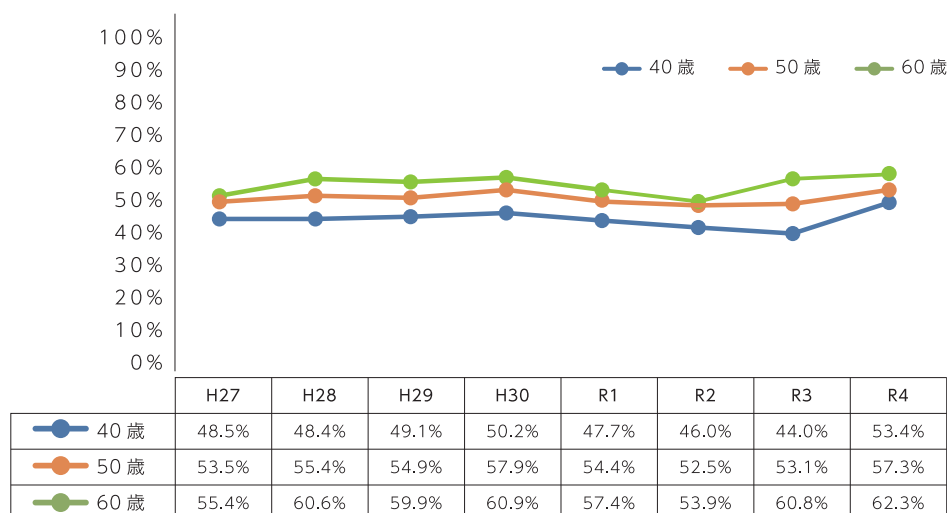
図 2-6 歯周病の有病率の全国平均と比較 (R4)



(令和4年度歯科疾患実態調査およびさっぽろ市歯周病検診より作成)

○ 歯周病を有する者の割合は40歳では40%代～50%代、50歳では50%代、60歳では50%代～60%代となっており、概ね横ばいで推移

図 2-7 歯周ポケット(4mm以上)を有する者の割合の年次推移



(さっぽろ市歯周病検診より作成)

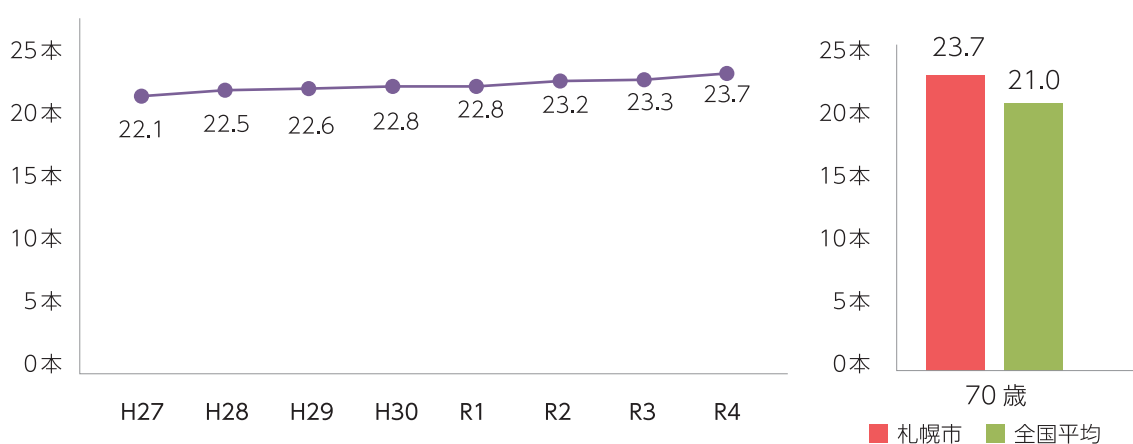
● 高齢期 (65 歳以上)

高齢期については、歯の本数が増加傾向にありますが、それに伴い、むし歯や歯周病を有する高齢者も増加傾向にあります。

また、「何でもかんで食べることができる」と回答した割合は年齢層が上がるにつれて低下し、後期高齢者においては約6割に留まっています。

○ 高齢者の歯の本数は増加傾向

図 2-8 平均現在歯数の年次推移と全国平均との比較 (70 歳)

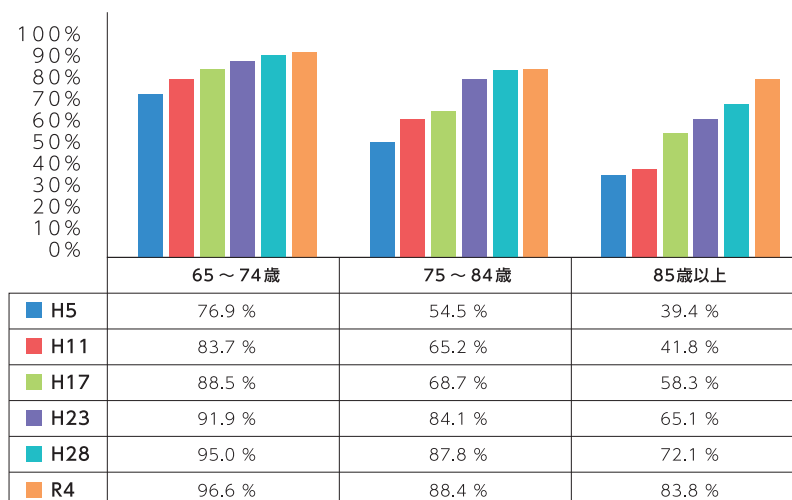


(令和4年度歯科疾患実態調査およびさっぽろ市歯周病検診より作成)

70歳では平成29年度(2017年)から令和4年度(2022年)で1本以上歯の数が増えています。全国平均よりも2本以上多く歯が残っている状況です。

○ 歯が多く残るのに伴い、むし歯を持つ高齢者も増加

図 2-9 むし歯をもつ者の割合年次推移 (65～74歳、75～84歳、85歳以上)

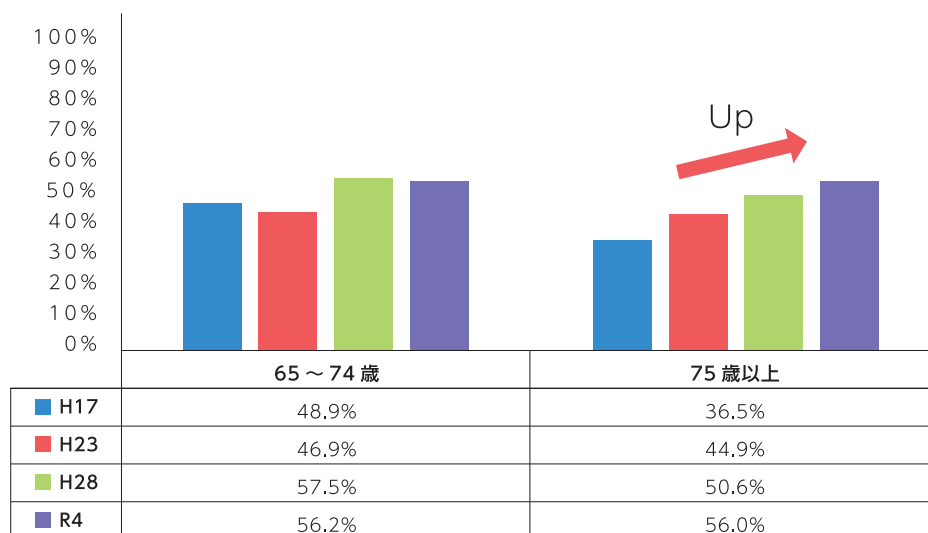


(令和4年度歯科疾患実態調査より作成)

65歳以上においてむし歯を有する者は年々増加し、65～74歳で96.6%、75～84歳で88.4%、85歳以上で83.8%と高値を示しています。

○ 歯が多く残るのに伴い、歯周病を持つ高齢者も増加

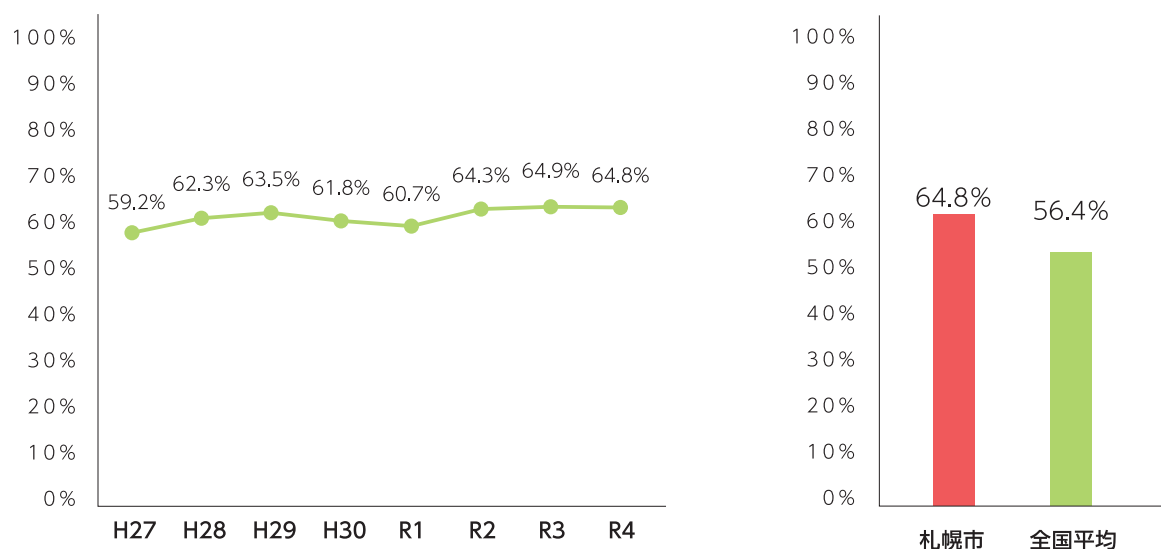
図 2-10 歯周ポケット(4mm以上)を有する者の割合(65～74歳、75歳以上)



(令和4年度歯科疾患実態調査より作成)

高齢者の歯周病は増加し、特に後期高齢者(75歳以上)で経年的な増加を認めました。

図 2-11 歯周ポケット(4mm以上)を有する者の割合の年次推移(左)と全国平均との比較(70歳)



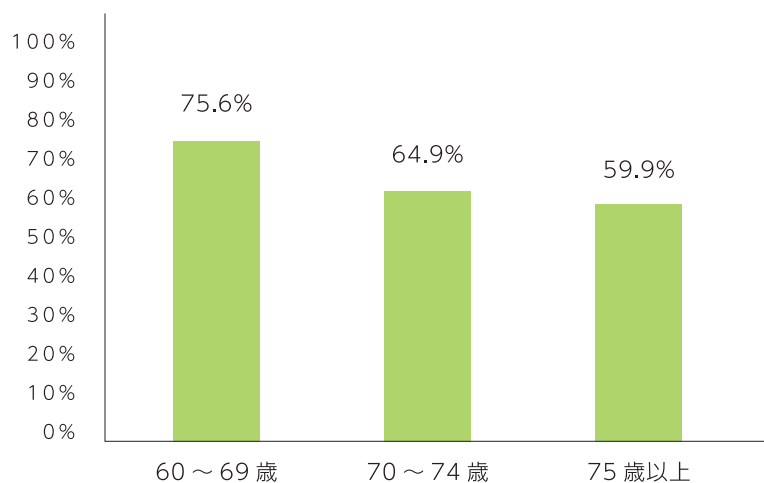
(令和4年度歯科疾患実態調査およびさっぽろ市歯周病検診より作成)

4mm以上の歯周ポケットを有する者の割合は平成27年(2015年)で59.2%、令和4年(2022年)で64.8%まで増加しています。

令和4年度歯科疾患実態調査によると、70歳の歯周病有病者率は56.4%でしたが、札幌市における70歳の歯周病有病者率は64.8%となっており、全国平均よりも高い状況となっています。

- 年齢層が上がるほど「何でもかんで食べることができる」と答える人の割合は減少し、75歳以上の後期高齢者においては、60%を下回っています。

図 2-12 何でもかんで食べることができる者の割合(高齢期・令和4年度)



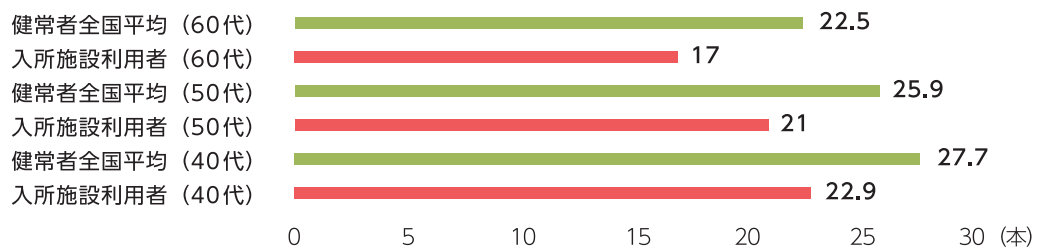
(令和4年度第2回市民意識調査より作成)

● 障がい者・障がい児

障がい者(児)については、健常者に比べて歯の本数が少なく、未処置のむし歯や歯周病の有病者率が多い状況となっています。

- 40代～60代の札幌市の入所施設利用者の現在歯数は健常者の全国平均※よりも約5本少ない。

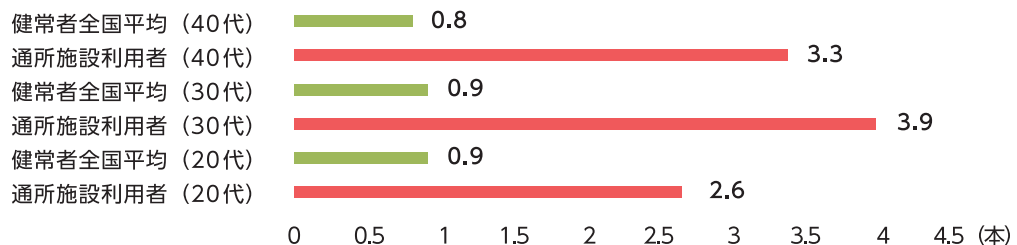
図 2-13 札幌市の入所施設利用者の現在歯数の全国平均との比較(40～60代)



(札幌市における知的障がい者施設利用者の口腔内状況調査により作成)

- 20代～40代の札幌市の通所施設利用者のむし歯は、健常者の全国平均※に比べ2.9～4.3倍多い。

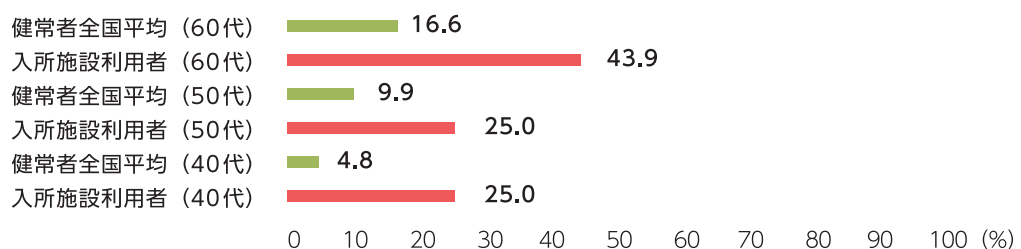
図 2-14 札幌市の通所施設利用者のむし歯の全国平均と比較(20代～40代)



(札幌市における知的障がい者施設利用者の口腔内状況調査より作成)

- 40代～60代の札幌市の入所施設利用者は、重度歯周病の有病率が健常者の全国平均※に比べ2.5～5.2倍多い。

図 2-15 札幌市の入所施設利用者の重度歯周病をもつ者の割合の全国平均との比較(40代～60代)



(札幌市における知的障がい者施設利用者の口腔内状況調査より作成)

※ 平成28年度歯科疾患実態調査結果